

スローライフのすすめ

朝岡正雄

人間総合科学研究科教授

はじめに

最近の若者は自炊をしないという。家庭でも、主婦が出来合いの料理を電子レンジで温めて食卓に出すといった習慣が一般化しつつある。素人がいくら努力したところで、本職の料理人が材料を吟味して作ったレトルト食品に勝てるわけがないというのも事実かもしれない。しかし、たとえまづくても、自分で作って、一人ではなく、何人かの仲間とではあるが、出来たてを食べる時のうまさは、キャンプの時の食事と一緒である。

私はインスタント食品やカップラーメンなど絶対に口にしないのに、息子は缶コーヒーを飲み、カップラーメンをおいしそうに食べる。その上、わが家で作った漬け物よりもマーケットで買ってきた方がうまいとのたまう。鯛を一匹買ってきて、出刃でさばいて、アラはすまし汁に身は刺身にしたり鯛茶漬けを作っても、「結構うまいじゃ

ん」の一言で終わってしまう。育てる過程でうまいものを食べさせてこなかった報いかもしれない。

野菜

つくば市の辺境、小貝川のほとりに移り住んで、今年で10年が過ぎようとしている。私が育った東京の家には、庭と言えるような空間はまったく存在しなかった。そのせいか、はたまた年のせいか、バーベキューのできる広い庭と野菜畑のある家を造った。それでも足りなくて、昨年、隣の土地を50坪ほど借り、屯田兵となって開墾し、大枚をかけて肥料も施した。

春先から丹精込めて育てたにもかかわらず、昨夏の日照不足で、南京豆も芋類も皆甘みが不足していた。それでも、私の育てた野菜たちは家族の胃袋の中に消えていった。秋口の異常な暖かさのために秋野菜は良く育ち、今もまだ食卓をにぎわわせている。

ブルーベリー

わが家の庭には、10年もののブルーベリーの木が2本ある。専門家の教えに従って、根本に80cm×1mぐらいの穴を掘ってピートモスを施しておいたので、毎年、冷蔵庫に入りきらない程の実をつける。家内がこれをジャムにする。わが家では消費しきれないので、家内は知り合いに配りまくっている。

梅干し

引越してから植えた2本の梅の木には何年かすると梅がたくさんなった。はじめは何も考えずに梅干しと梅ジュースを作っていた。そのうち出来映えが気になるようになり、梅干しには南高梅の木の方になった大きな実だけを使い、足りない分は八百屋で買うようになった。

1本しかない南高梅の木もだいぶ大きくなって今年は大収穫かと思った今年の夏、わが家の大事な梅の木は無惨にも虫に食われて倒れてしまった。結局、昨年は梅を6kg買って漬け、わが家では、それで作った梅干しが今や遅しと出番を待っている。10年後を夢見て、昨年の夏、また南高梅の苗を2本庭に植えた。

柿

甘柿の木も渋柿の木も植えてからすでに

7年ほど立っている。一昨年は全国的に柿の大豊作だったが、昨年は不作だった。わずかししか採れなかった甘柿は、家族の誰も食べたがらなかったのも、すべて私の胃袋に収まった。

渋柿は干し柿を作りたくて植えた。3年前にはじめて干し柿を作ったときは、「うまくできた！」と思った。しかし、黒ずんだ見てくれのために、誰も喜んでくれなかった。一昨年は、この反省を生かし、大豊作の柿を使って、白く粉の吹いた上品な干し柿を15個ほど作り、自慢しながらあちこちに配った。

昨年は天候不順で、渋柿は全部で7つしかならなかった。皮をむき大事に軒先につるしたが、悪いときには悪いことが重なるもので、秋から冬にかけて暖かい日が続き、すべて腐ってしまった。「来年こそは！」と、正月に誓いを立てた。

キウイ

わが家のキウイはゴールデンという品種で、実が黄色い。雄と雌を一本ずつ買ってきて、ウッドデッキのパーゴラに絡むように植えた。すぐに花が咲き、実が付いたが、実が大きくなる前に落ちてしまう。なぜか分からないまま何年か経って、雄の木と雌の木の花が同じ格好をしていることに気付いた。新しい雄の木を買い、花が咲くのに2

年かかった。

昨年は3年目でたくさんの実が付き、12月に入ってリンゴと一緒にして追熟させた。それにもかかわらず、たぶん夏の日照不足のせいで、わが家のキウイはあまり甘くなかった。誰も見向きもしないキウイも、庭にある餌台に乗せておくと、鳥たちがせつせつと食べてくれる。

アケビ

わが家の北側のフェンスには、3本のアケビがからみついて、毎年大きな実をたくさん付ける。最初の内は珍しくて、いろいろな人に配っていたが、今は紫色の実をそのまま部屋に飾って、秋を愛でるのに使っている。

師走も押し迫ったところにアケビの蔓を収穫し、毎年大きな籠と小さな籠をひとつずつ編む。うまくできたら人にあげ、まずいのは家にかざってある。

門松

門松の作り方は、はじめはドッグフードの空き缶を使って、近所の人から教わった。以来毎年12月25日を過ぎると藁を買ってきて土台を作り、近所の農家から孟宗竹をもらい、松をたくさんと、梅と南天を買ってきて門松を組み上げる。毎年少しずつ大きくしていった、今はすでに1m程の高さ

の門松になっている。何度やっても、土台の藁を編むのはうまくいかないし、竹も日本刀で切ったようには切れない。それでも、毎年、二軒分の門松を作り続けている。

懲りずに

近所の農家の人と話していて感心させられたことがある。米は年に一度しか作れないので、米づくりは、独り立ちして本気で農業をする気になってから最大でも40回くらいしか試せないという。だから毎年が真剣勝負。それでも、毎年毎年失敗の連続で、うまくいったのは数える程しかない。しかも自然は残酷で、手間暇かけたものを一瞬のうちに台無しにしてしまう。そんな中で、後何回できるのか、どうすればうまくいくのかを考え、その年の結果に一喜一憂するのがたまたま面白くというのである。

昨年の夏、新たに2本の南高梅を植えた時に、隣に借りた畑の脇に、懲りずに梨の木を1本とリンゴの木を2本植えた。冬になって葉が落ちてからこの3本の本を剪定し、今は添え木をして樹形を整えている。何年かかるか分からないが、梨は私の大好物だし、リンゴは、子供の頃母がよく作ってくれた焼きリンゴにでもしてみようかと考えている。

(あさおか まさお/スポーツ運動学)